

最終章

言葉ノ続キ

【鏡花／現代エンド】

門をくぐると、朱色の本堂の真上に赤い満月が昇っていた。まるで月の光そのものが、本堂を朱に染めているようにも見える。本堂の両脇に鎮座するのは、狛犬ではなく狛虎だ。なんでも毘沙門様は寅の年、寅の日、寅の刻にこの世に降臨されたとかで、この狛虎はそれにちなんでいるらしい。

——私は誰かを探していた。大切な約束を果たすために。

「やあ、芽衣ちゃん」

「っ！」

背後から私の肩を叩いたのは、チャーリーさんだった。

「はは、驚かせてしまったようで悪かったね」

「ほ、ほんとにびっくりした」

でも、まさかここで会えると思わなかった。いくらチャーリーさんの格好は悪目立ちするといっても、こんな人混みのなかではさすがに見つけづらいと思ったから。

「で、誰を探していたのかな？」

「え？」

「僕は君と、満月の夜に日比谷公園で待ち合わせしていたはずだ」

「でもおかしなことに君は今、僕との約束とは違う場所にいるようだからね」

(あ……)

「もしかしたら君は、誰か別の人と約束でもしていたのかな？　と思ったんだよ」

(違う、そうじゃないの。チャーリーさん)

私はただ、人の流れに飲み込まれてしまったただけだ。でもなにを言っても言いわけのようになってしまう気がして、私は押し黙った。

「その人は、君にとって大事な人なのかな？」

なおも彼は、その話題で食い下がってくる。

「さあ、よく考えて。これは大切な質問だよ？　君にとってその人は、現代での生活よりも大切なものなのかな？」

「それは……。よくわからない」

実はまだ迷ってる。

現代に帰らなきゃ……と思いつつも、この時代に心残りがあるのもたしかだ。

「……へえ？　あんなに帰りたいたって言ったのに？」

そう、私はつい最近まで、自分が現代に帰ることを選ぶと信じて疑わなかった。

(でも、どうして……帰らなきゃいけないと思うんだろ？)

家族や友達が待っているから？

生まれ育った世界だから？

すべてを捨てるのは無責任だから――？

（じゃあ、私を好きになってくれたあの人を置いて帰ることも、無責任なんじゃないの？）

私がいなくなったら、あの人はどう思うんだろう。

私がないこの世界で、私のことを探し回ったりするのかもしれない。

まさか私が違う時代に帰ったとは思わないだろうから。

（――そんなことさせたくない）

私を必要としてくれるなら、そばにいたい。

「誰か、大切な人ができた？」

私ほうなづいた。まぶたの裏が熱くなる。

「その人と離れたくないんだね」

もう1度、うなづいた。

たったそれだけの理由で私はここから動けずにいる。私がもう少し大人なら、きっとこんな気持ちに振り回されたりしないのかもしれない。

「それなら、離れなければいいよ」

チャーリーさんは難なく答えた。

「離れたくなければ、離れなければいい。おそらくその人も君と同じことを思っているはずだ」

「……そんなのわからない。簡単に言わないで」

「いや、簡単な話さ」

「どんなに大がかりなマジックでも、タネあかしをしてしまえば仕掛けなんて拍子抜けするほど簡単なものなんだよ」

「……？」

説得力があるような、ないような。よくわからないたどえだった。

「信じられない？　じゃあ、これからすごいマジックを見せてあげよう」

「え？」

「芽衣ちゃんだけの特別サービスだ。今から、ここに君の大切な人が現れるからね」

「なに言ってるの」

そんなはずない。現れるわけがない。

「心配しなくても大丈夫だよ。明治だろうが現代だろうが、どこにいたって彼は君のことを大切にしてくれるはずだから」

「チャーリーさんっ」

だんだんと喧噪が遠のいていく。人々の笑い声も、風が木々を揺らす音も。

\*

——赤い月だけが、暗闇を照らし出す。

(チャーリーさん)

私は何度も呼びかけた。

(教えて。あなたは誰なの?)

その問いに答える代わりに、彼はニヤリと道化師のような笑顔を浮かべた。

「幸せになるんだよ、芽衣ちゃん」

ぱちんと、大きく指を鳴らした。

\*

「芽衣？」

(え?)

「まったく、なにしてるんだよ。ぼさつとして」

私の目の前に、鏡花さんがいる。さっきまであの奇術師がいたはずの場所に、不機嫌そうな顔をした鏡花さんが立っていた。

(……チャーリーさんは? どこ?)

周囲を見回しても奇術師の痕跡はなく、私は混乱する頭で、再び鏡花さんへと視線を戻した。

「ねえ、どこに行ってたのさ? まああんたのことだから、肉の焼ける匂いかなにかに釣られたに決まってるけどさあ」

「違います。私、ずっと鏡花さんのこと探してたんです」

今まで、いつも肩に乗った白ウサギを目印に、鏡花さんのその姿を追い続けていた。何度か見失いそうになったけど、ようやくこの人の隣にたどり着けた。

「どうだか。怪しいもんだよね」

「本当ですってば」

するとその時、私の足もとをものすごい速さで白いものが横切っていった。白くて丸い頭に、長い耳。跳ぶように地面を駆ける小さな足。あれは——鏡花さんの白ウサギだ。白ウサギは人混みをすり抜け、お祭り会場から遠ざかるように走り去っていく。

「鏡花さん、あのウサギが」

「えっ？」

「今、そこを走っていったんです。追いかけてみましょうっ」

「ええっ？　ちよ、ちよっと待ちなよ、待っててば！」

薄闇の中で、ウサギの白は目立つ。だから私は見失いようがなかった。

（いったいどこに行くんだらう？）

ただまっすぐに、この道の先を目指して。そこになにがあるのか、もうわかっていると言いたげに駆けていく。

「あの子、どこに行くんでしょうね？」

とたずねると、鏡花さんはあきれ顔で答えた。

「そんなの知らないけどさ……別にいいよ。あんたが行きたい場所ならどこでもいいんだ。……たとえば、この時代じゃなくなっちゃってさ」

そうつぶやいた鏡花さんの瞳は、白ウサギが先導する道を映していた。

「鏡花さん……」

(私も鏡花さんと一緒にいたい)

(帰りたい、鏡花さんとともに)

「ほら……。僕の手につかまりたければ、つかまってもいいけど？」

鏡花さんはほのかに頬を染めながら、私に手を差し伸べた。

「あんたの足じゃ遅いから、僕が連れて行ってあげるよ。しょうがないからさ」

その手に手を重ね、私たちは走り出した。同じ速度で、白ウサギのように軽やかな足

取りで。白ウサギが導くこの先の未来へ。

新たな物語を、2人で紡いでいくために――

\*

――まぶたの向こうに、やわらかな光を感じた。

ざわざわと人の気配。子どもたちの笑い声。

(ここは……)

私は、この場所を知っている。あれは、今からちょうど1カ月前――

「さあ、お立ち会いお立ち会い！ 手前ここに取り出したる陣中膏はこれ、ガマの油。ガマと言ってもそんじよそこらのガマとは物が違う！」

「ハイご通行中の皆様、容貌奇妙にして珍妙なるこの娘、親の因果が子に報い、生まれ出たるはへび女！ お代はあとで結構だよ、ハイ入って入って！」

——私が明治時代に飛ばされてしまった、あの夜に訪れた縁日だ。

そして私の隣には、鏡花さんがいる。

彼は私の手を握りしめ、すでになにかを悟ったような顔で、私を見下ろしていた

(どうして、ここに……?)

ただ1つわかるのは、ここは現代だということ。どうやら私と鏡花さんは、チャーリーさんの不思議なマジックによって、2人一緒に現代へと飛ばされてしまったらしい。

\*

そして現代に帰ってきた私は、チャーリーさんの言葉どおり、すべての記憶を取り戻していた。

私は東京都のとある普通高校に通う、女子高生だ。成績は中の中、多くはないけど少なくとも友達に囲まれ、平凡な高校生活を送っていた。家族構成は、両親と妹が1人。親は骨董品屋を営み、私は幼い頃から古いものに囲まれて育った。

飴色の茶箆筒に細竿の三味線、紫檀の文机。切子細工のガラスの灰皿。そんな古いものの匂いや手触りが好きだったことを、現代に帰ってきてから思い出した。

\*

——それから1年後。

鏡花さんは今も、新宿区横寺町に現存する、尾崎紅葉先生の旧家で暮らしている。

彼の創作意欲は、現代に場を移しても衰えることを知らなかった。

新進気鋭の戯曲家としてすぐに名を広め、多くの演出家からアプローチを受けているらしい。そして鏡花さんが書いた戯曲『夜叉ヶ池』は、泉鏡花の代表作として、現代でも多くの役者たちによって舞台化されている。

——鏡花さんはもう、明治時代には帰らない。

生きる時代が変わっても、変わらずに残り続ける物語がある。生きる世界を失っても、新たな世界で結ばれた『夜叉ヶ池』の晁と百合のように――。

その物語たちを、私も見守り続けていきたい。鏡花さんとともに。

\*

「……懐かしいなあ、この坂。ほら、覚えてる？ 三年坂だよ。いつかあんと歩いただろ？」

数歩前を歩く、鏡花さんの後ろ姿。

その日、私たちは現代の神楽坂をのんびりと2人で散策していた。

「……ああ、覚えてます！鏡花さんが転びそうになった坂ですね」

「思い出すのが遅いよ。ホント、ぼんやりしてるよね。あんたってさ……まったく、おもしろくないな。これじゃまるで、僕だけがあんとこの思い出を大事にしてるみたいじゃないか」

彼は私を振り返るとすねたように口を尖らせる。

「私だって、鏡花さんとの思い出は大事にしていますよ？」

「ふんっ、もういい。あんたとの思い出なんか、さっさと忘れてやるからね。謝るなら今のうちだよっ」

鏡花さんは再びくるりと前を向くと、私を置いてすたすたと歩いて行ってしまふ

(この人はあいかわらずだなあ……)

まあそんな態度も慣れっこだ。なにせ明治の頃から一緒にいるのだから。

「ごめんなさい、鏡花さん。本当に忘れてたわけじゃないんです」

慌ててあとを追いなからそう言うと、鏡花さんは再び私を振り返り、『当然だ』とでもいうように頷いた。

「ふうん？ 悪いと思ってるんだ。だったらまあ、許してやらないこともないけどね」

とりあえず機嫌は直ったらしい。

彼は歩調をゆるめ、感慨深げなまなざしで

街の景色を眺めている。

「それにしても、神楽坂はずいぶんと様変わりしたんだな……道だってきれいに舗装されてるし、商店の数もかなり増えたみたいだ」

「でも、変わってないところも多いみたいですよ」

「……ああ。善國寺や赤城神社はそのままだし、僕がひいきにしていた『うを徳』や『相馬屋』もまだ残ってる。少し安心したよ。なにもかもがなくなってしまったわけじゃないってわかってさ」

安堵の笑み。やはり鏡花さんにとって、神楽坂という街は特別な場所だったんだと思う。

「一本路地に入ると、まだあの頃の面影が残っていますよね」

「うん。不思議だよね……。この界限を歩いていると、自分がまだあの時代にいるような気になる時があるんだよ。……。その角から、芸者の格好した川上がひょいっと出てくるんじゃないかってさ」

(たしかに……)

着物姿の女の人を見かけるたびにドキツとしてしまうのは、どうやら私だけではなかったようだ。

「はは、もしこの時代の神楽坂を川上が見たら、きっと仰天して腰を抜かすだろうな。あーあ。この携帯電話、っていうのであいつと連絡が取れるなら、この街の写真を今すぐ送りつけてやるのにさ」

音二郎さんの驚く顔が目には浮かぶ。でも、すぐにおもしろがって『もっと送れ!』なんて言ってくれそうだ。

「あ……そういえばもうすぐ、明治座で『夜叉ヶ池』が始まりますね」

「ああ、そうだったっけ」

「……今の時代にしてみれば、ずいぶんと古い戯曲なのに。いろんな趣味の人間がいるもんだよ」

興味がなさそうに言いながらも、その表情は少しだけ得意げだ。鏡花さんの戯曲は現在でも不朽の名作として、有名無名問わず多くの人々の手によって上演されている。

「まあでも、僕の作品は時代を超えて通用するんだってこと、あの時代の評論家たちに教えてやりたい気はあるよ。まったく、ざまあみろっていうんだ。作品に込めた魂は、時代を超えても生き続けるんだよ。僕はそれがわかっただけでも、この時代にやって来た意味があったと思ってる」

過去に評論家から酷評されたことがあるのか、鏡花さんは実感とともにそうぼやいた。

「……で、どうするの？」

鏡花さんは私に視線を向け、急にたずねてきた。

「なにがですか？」

「なにがですかって、あんた、自分で話を振っというてすつとぼける気？」

鏡花さんの目が一気につり上がる。

「……え？」

「え、じゃないよっ。『夜叉ヶ池』の舞台が始まるんだろ？ あんたはその舞台を観たくないのかよ」

「それはもちろん、観たいですけど」

「ほら、観たいんだろ？ だったら早くそう言いなよ。……あんたがどうしてもって言うなら、一緒に連れて行ってあげてもいいからさ」

「……え？ いいんですか？ ありがとうございます！」

本当はずっと、舞台を観たいと思っていた私。でも鏡花さんはあまり興味がなさそうだったので、一緒に行こうとは言い出せずにいた。

「絶対絶対、約束ですからね？ 私、すごく楽しみにしていますから」

「な、なんだよ、そんなに素直に喜ぶなよ。……あんた、初めて会った時はずっとおどおどしてたのにさ。変わったよねえ、まったく」

「ふふ、そうですか？」

「そうだよ。なんかどんどん凶々しくなってるっていうかさあ。……まあ、別にいいけどね。あんたが素直だろうが凶々しかろうが、僕は……」

(僕は……?)

私はその続きを期待して、鏡花さんの顔を見つめる。私から視線をはずす鏡花さんの頬は、心なしか赤く染まっているように見えた。

「……なんだよ。続きなんか期待したって無駄だよ。絶対に言わないから」

「そんなあ。待ってたのに」

「当たり前じゃないか。なんでそんな恥ずかしいこと、僕があんたに言ってやらなきゃならないんだよっ」

(そんなに恥ずかしいことを言おうとしたの……?)

それならますます、続きを聞きたいという気分になる。

「教えてくださいよ。ちよつとだけでいいから」

「嫌だって言ってるだろっ? ……もういいから、ほら……こっちに来なっば」

そう言うと同時に、鏡花さんは私の右手を掴み、自分のほうへ引き寄せた。つながれた手。絡む指。すぐに2人の体温がしっくりとなじむ。

「……そんなに離れて歩かれたら、はぐれちゃうかもしれないじゃないか」

(そう言われても……)

私は、明治時代で過ごした日々を思い出す。

「前に、離れて歩けて言われたから」

「……もう。いったいいつの時代の話をしてるんだよ」

少し気まずそうに言ってから、つないだ手にさらに力を込めた。

「それ、100年近くも昔の話だね。そんな言いつけ、律儀に守らなくていいよ」

「鏡花さん……」

「……こうやって、手をつないで歩いたほうがずっといい。あんたが迷子になって、面倒な事態に発展するよりはさ、そのほうがずっといいよ」

そして、もう1度私を引き寄せると、耳もとに口を寄せて囁いた。

「だから、僕のそばを離れたりするんじゃないよ。いつも隣りにいること。……わかった？ この言いつけは、これからもずっととずっと、守ってもらわないと困るからね。……あんたはもう、僕のものなんだから」

「……………」

「ねえ、わかってるの？」

真っ赤な顔で返事を急かす鏡花さんに、私は満面の笑みで頷いた。

「ちゃんとわかってますよ。鏡花さん」

「……ふうん？」

私たちは手をつないだまま、懐かしい坂を上る。同じ目線と、同じ歩調で。この街での記憶を1つ1つ思い出しながら、坂の向こうに待つ明日を目指して――

） F I N （